

＜組織・構成員＞

－臨床検査センター－

部長：高野 徹 精度管理者：高野 徹
部門長：花田 浩之 部門長代理：中村 雅美
臨床検査技師（総数）：39名（非常勤2名，臨時嘱託員2名含む）

－輸血・細胞治療センター－

部長：釜江 剛
担当技師：4名（他部門と兼務者含む）

＜基本方針・目標＞

《基本方針》

- ・常に患者様の立場に立って考え行動します。
- ・精度の向上を図り、良質な検査結果を提供します。
- ・業務・経営改善に努力し効率のよい検査を行います。

《目標》

- ・検査の迅速化および効率的な運用を行い、待ち時間の短縮に貢献する。
- ・精度管理ならびに検査技術のさらなる向上を目指す。
- ・チーム医療を目指した多職種間の交流と技術習得のための講習会を開催する。
- ・予防医学を含めた地域医療の体制強化に貢献する。
- ・研修体制を確立させ有機的な人事交流を実践する。
- ・耐用年数を見据えた機器更新の円滑導入に向けた計画の策定。
- ・業務負担の不均等を改善し、残業時間を20%削減する。
- ・コンプライアンスの推進のため業務マニュアルを整備する。

《概要》

タスクシフト/シェアを積極的に進めていくために、厚生労働大臣指定講習会を受講し、静脈路確保と造影超音波検査をタスクシフト/シェアすることができた。

＜各部門の概要及び実績＞

《検体（生化学、免疫、血液、一般）検査》

他部門と兼務可能な人員育成を継続した効果は順調に表れている。全体的な検査依頼件数は、前年度に比べ5.2%増加した。内訳は外来が4.8%、入院が5.7%の増加であった。外注検査項目数も5.9%増加しており、委託業者への支払い金額も891万円（10.9%）増加した。これは昨年同様、遺伝子関連検査が増えたためと考える。

【今年度の反省と来年度への抱負】

病棟や救急外来などで使用している血液ガス分析装置の精度保証や機器トラブルなどに迅速に対応できるよう管理体制を整え、検査試薬や高額な消耗部品のコスト削減に取り組み1年が経過した。この間、精度管理試薬を購入して精度保証を行ったにもかかわらず、定価ベースで220万円のコスト削減を達成することができた。しかし、一部の消耗部品のコストが増大しており、メンテナンスの方法に改善の余地があることが示唆された。

現在、臨床検査部門では10項目以上の生化学検査を削減する取り組みやバスの検査項目の検討をはじめとして、検査依頼数が少ない項目の外部委託化など、検体検査にかかるコストを削減する取り組みを開始している。今後、さらなる業務改革を進め、検査業務を集約化して病院経営に貢献したいと考える。

《検査情報室》

臨床側の要望に迅速に対応するために検査情報を一元管理している。臨床研究検体や治験検体の対応や新規検査項目の導入、critical value(以下:パニック値)報告など、様々な臨床側の要望に迅速に対応している。

【今年度の反省と来年度への抱負】

今年度の電子カルテ新規導入検査は、臨床側からの要望も含めて9項目であった。当科から報告したパニック値報告件数は967件で、そのうち964件は直接医師に報告できた。また、2025年1月より日本臨床検査医学会の提言書にある「生命が危ぶまれるほど危険な状態にあることを示唆する異常値」にパニック値項目を見直し、併せて電子カルテに報告記録を残す運用を開始した。次に、治験検体の処理件数は454件、正式に依頼された臨床研究検体の保管件数は222件であった。反省点としては、治験検体や臨床研究検体の処理数が大幅に増えたことで、検体提出にかかわる情報共有ができなかったことがあり、適切な出検体制の点で臨床からの要望に対応できないことがあった。

臨床研究検体の提出に際して、一部の委託業者では電子カルテによる依頼が出来ないために臨床の先生方にご不便をおかけしている。この問題を解消すべく検査委託業者に協力をお願いして電子カルテによる検査依頼が出来る体制を構築する予定である。このように、検査部門の窓口として他部署との架け橋となり、様々な情報を整理することで新たなニーズを生み出し、そして、経営や学術活動、患者のアウトカムに寄与できる部門でありたいと考える。

《細菌検査》

昨年度、発生した複数の病棟にわたるVREのアウトブレイクは、いくつかの病棟では収束したが、2病棟においては、来年度も監視培養が継続されることとなった。

また、マルチプレックスPCR検査機器「FilmArray」の導入により、髄液中のウイルス等、通常、院内では早期に報告することが難しい病原微生物の報告ができた。

夜間・休日に陽性となった血液培養のグラム染色結果を報告する体制を整えた。

【今年度の反省と来年度への抱負】

昨年度から継続して、保健所の指導の下、VRE陽性患者がいた病棟において2週間ごとの監視培養を継続した。いくつかの病棟では、院内発生と思われる新規患者が認められず、定期的な監視培養が終了した。しかし、2病棟で院内伝播を疑われる新規患者が発生したため、来年度も監視培養が継続されることとなった。

また、昨年度導入した、マルチプレックスPCR検査機器「FilmArray」の髄膜炎・脳炎パネルにより、院内では検査困難な髄液中のウイルスを検出し、当日中のウイルス性髄膜炎の診断に貢献することができた。一方、呼吸器パネルには、肺炎の原因となるレジオネラが検出できないことを受け、LAMP法によるレジオネラDNA検出検査を導入した。現在までにレジオネラは検出されていないが、感染症法上4類感染症に分類されているため、陽性となった際には速やかな届出ができるようにしていきたい。

さらに、血液培養陽性は細菌検査におけるパニック値であると捉え、夜間・休日などの時間外に陽性となった血液培養のグラム染色を主治医に報告する体制を構築した。そのために、日当直業務を担当する技師に対し、グラム染色の研修を行い、また、参考となる資料を作成し、より正確な結果報告が行えるよう努めた。

昨年度より、AST回診の前に、黄色ブドウ球菌血症・カンジダ血症について、合併症検索や治療期間に関するコメントのカルテ記載を開始した件については、血液培養の再検査や、早期の合併症検索、特にカンジダ眼内炎のための眼科受診がほとんどの患者で行われており、菌推定段階でのカルテ記載に効果があったものと考えられる。

来年度は大阪万国博覧会が開催されるに伴い、これまで以上に海外渡航歴・入院歴のある患者が来ることが想定される。薬剤耐性菌用のスクリーニング培地の充実を図り、早期に薬剤耐性菌の検出ができるように努めたい。

《生理機能検査》

業務を円滑に進めるために多領域の検査を兼務できるよう人員育成を進めている。また、日本超音波検査学会が制定する「超音波検査室の精度認定制度」で、腹部、心臓、血管、体表、健診の5領域すべてに関しA評価判定による精度認定を取得し、より良質な検査報告体制を整えている。

救命センターの検査も受け入れることで、より重症度が高い患者に対する迅速な治療介入にも寄与している。

産科での胎児エコー検査や耳鼻科での聴力検査など検査室以外での業務を行い、タスクシフト/シェアにも貢献している。

【今年度の反省と来年度への抱負】

超音波検査の標準化を目指し、特に循環器領域の検査内容変更を臨床側に提案し検査予約枠の増加に努めた。波及効果として当日依頼の地域の紹介患者の検査受け入れも柔軟に対応することができた。

2024年度より、経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)が行われるようになり、準備の段階から会議やカンファレンスに超音波技師が参加し、チーム医療の一員として活動できた。

以前より脳神経外科より依頼があったが対応できていなかった急性期脳梗塞患者に対する、長時間心電図検査や心エコー検査におけるマイクロバブル検査の対応を開始し、ICM植え込みまでシームレスな対応の手助けができた。

アブレーション対象患者の増加のため循環器科から7日間ホルター心電図検査枠増加の要望に対して、週7件から16件へ増加し、更に当日追加対応も柔軟に行っている。

頸動脈エコー検査や腹部エコー検査の業務内容見直しを進め、更なる効率化を目指し検査件数増加につなげていきたい。またマイクロバブル検査においては、現在は医師と業務調整で行っているがタスクシフト/シェアの認定講習会受講技師のみで対応できるよう体制を構築していきたい。

対応年数を過ぎた装置があり、円滑な機器更新が行えるよう資材のコストカットを含めた提案をしていきたい。

《輸血・細胞治療センター》

2024年度の各製剤の使用数は昨年度より赤血球製剤、新鮮凍結血漿は減少し、血小板製剤は増加した。輸血検査項目は昨年度より増加した。

【今年度の反省と来年度への抱負】

赤血球製剤の廃棄率は昨年度と同じであるが、廃棄本数が増え、新鮮凍結血漿、血小板製剤の廃棄は減少していた。出庫先での保管体制の不備、ヒューマンエラーによる廃棄も昨年度と変わらず発生しており、より血液製剤の適正管理の呼びかけが必要である。

来年度は廃棄製剤の減少を継続していく。また、医師のタスクシフトに協力していきたい。

<認定検査士>

・超音波検査士

(超音波指導検査士(腹部領域)) 1名、
(消化器領域) 7名、(循環器領域) 6名、
(表在領域) 4名、(泌尿器領域) 3名、
(血管領域) 3名、(健診領域) 3名

・血管診療技師 1名

・細胞検査士 1名、(国際資格) 1名

・認定血液検査技師 2名

・骨髄検査技師 1名

・認定輸血検査技師 1名

・認定サイトメトリー技術者 1名

・細胞治療認定管理師 2名

・救命検査認定技師 2名

・緊急臨床検査士 4名

・心電図検定1級 2名

・心電図検定2級 4名

・臨床病理同学院 二級臨床病理技術士(細菌) 2名

・循環器病療養指導士 3名

・未病専門指導師 1名

・POCTコーディネーター 2名

・大阪府肝炎医療コーディネーター 2名

・特定化学物質四アルキル鉛等作業主任者 1名

・臨地実習指導者 1名